飛鳥高探偵小説選Ⅲ

目次

創作篇

死刑台へどうぞ……2
＊
見たのは誰だ……158
断崖……171
飯場の殺人……193
赤いチューリップ……197
誰が一服盛ったか……210
欲望の断層……218
幻への脱走……236
東京完全犯罪……248
荒涼たる青春……261
とられた鏡……273

評論・随筆篇

尼僧に口説かれた青海島での幼年期……316
波のまにまに……322
草取り……326
騎馬型技術……327
歳月の墓標……329

インタビュー

遠き歳月を追って（インタビュアー・廣澤吉泰）……336
【解題】廣澤吉泰……363
飛鳥高著作・著書リスト……372

凡　例

一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。

一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。

一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。

一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。

一、あきらかな誤植は訂正した。

一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。

一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

死刑台へどうぞ

第一章　男と女

1

幅五メートルばかりの舗装した灰黒色の道が真直に延びていた。

道の左側には塀が連って、所々に門があった。右側は、少し小高くなって、石垣が積んであり、その白い御影石に朝日が当っていた。石垣は南を向いているのであった。

空は晴れていたが、その青さは白くぼんやりと濁っていた。塀の影で縦に半分に切られた道には、人の姿もなく、あたりはひどく静かであった。見える全てのものの姿は、明るくはっきりとしており、そして、じっと動かなかった。

石垣を斜めに切って緩い勾配で登っている道があった。黒いズボンに赤いセーターを着た久保がその道を登っていた。油気のない髪が濃い眉の上に垂れさがり、浅黒い細い顔にもの思わしげな影を作っていた。彼は眩しそうに眼を坂の上に向けた。

石垣の上に、四角な灰青色の建物があった。コンクリートのブロックを積み上げたその家は、ひどく不細工な姿で無遠慮にそこに坐っていた。それは眼の前の家並と太陽に、冷たい敵意をもって相対しているようであった。

坂の上に沈丁花の木が大きい球のような形をして植わっていた。花はまだ蕾で、ほんの僅かしか咲いていなかったが、幽かな匂が漂っていた。久保は、訝しげな眼を花へ向けた。

ブロックの家の端の所に理髪に言ったばかりの頭をした血色のいい男が立っていた。

男は満足感を隠すように顔をしかめて太陽の方を向いていた。赤いコートの上に白いレースのショールを掛けた女が、ドアに鍵をかけていた。彼女は、ノブを握ってドアが動かないのを確かめると、ショールを直しながら男の方へ歩いて来た。男は歩き出した。

久保とすれ違う時、女は視線を流した。
――また来たわ。
――そうさ、また来たよ。
久保の眼は答えた。
――あの得体の知れない女の所へ。
――平和な君達には関係のないことだよ。
女はまた、ショールを直して、夫と並んだ。
久保は、家の向う端にもう一つあるドアの所へ行ってベルのボタンを押した。それから、その横に置いてある水色の真新しい乗用車の方に向いた。車体は滑らかに輝いていた。
彼は腰をかがめて、口づけをするように顔を近づけた。その瞳は、車体と同じように生き生きと輝いていた。ガラスに映ったその顔は、満足げな微笑みを浮べた。
ドアの開く音がした。
久保は、微笑した顔をその方へ向けた。女は、白い薄いネグリジェを着て、無表情な眼を向けていた。久保は中へ入った。
部屋には、大きく開けた南側の窓から光が眩しく射しこんでいた。窓の左右には白いレースのカーテンがあった。投げ出してある雑誌をよけて、久保はソファに腰をおろした。低いテーブルの上にテープレコーダーが置いてあった。
「始めたの」
と久保は尋ねた。
女は隣室の部屋で化粧を続けていた。間のドアは開いていた。
「始めようとしたんだけど――」
女は髪をすいていた。
「うん」
「出だしは、スムースにゆかないわ。いつもそうよ、わたし」
「どのくらい、行った?」
久保はテープの方を調べるような視線で見た。
「ほんの僅かよ。テープレコーダーだと、読み返すのが面倒ね。書いた方がいいかしら。でもわたし、書くとすぐ手首が疲れるの。手が弱いのね」
「馴れないからさ」
「そうね」
「できたら、どこへ持って行く」
「やっぱり、あそこにしようかしら」
「ふん――」
久保はソファに背を伸してタバコを出した。
「でも、これは絶対売れるわ」

「ふん。どんな話？」
「中年の一人の男の話よ」
「どんな」
女は暫く黙っていた。髪にブラシをかける音が続いた。やがて女は、独り言のような調子で喋り出した。
「有力な代議士の選挙のために華々しく活躍した男が、その選挙の違反事実が明らかになるに従って、皆から責任を一人に被せられてだんだん孤独になって行くの。最後に殺されるの。その死体になった所から話を始めるのよ」
「ありそうなテーマだな」
「あった？」
「知らないけど」
「男の殺された事情が明らかになるに従って、社会のどうにもならないいろんな事実や、思いがけない結び付きが出てくるのよ」
「社会派だな」
「そうじゃないわ。哀れで汚ない人間を書くのよ。一番大事なのは、これを現実の人物や機構にあてはめて書くのよ。売れるわ、きっと」
「問題を起すぜ」
「その方がいいわ」
「出版社が躊躇するかも知れない」
「そうでもないわ」
「僕はあの編集長をよく知っている。僕から頼んでもいいよ」
「頼むわ。きっと売れるわよ」
「作家になるんだな」
「久男は作家にならないの」
久保は返事に困ったように瞬きをした。
「書いてる？」
「――ああ」
「どんなの？」
「若い男と女の話だよ」
「わたし達みたいな？」
「――そう」
「どっちかが死ぬの」
「――うん」
「どっち？」
「女さ」
「なぜ？」
「男には、女から愛されているという証拠を掴むことができないからさ」
女がドアの所に現れた。女の背丈は男と同じ位であっ

た。堅そうな髪が大きくひろがって、眼も鼻も大きかった。女は男の傍へ寄ると見下すようにして立った。男は、女のその張った腰に、何か思い出そうとするような視線を向けていた。

「なぜ愛されていることが分らないの」

女は、その体を一層男の顔の方へ近づけた。男はまばたきをした。

「もともと男は、女に愛される必要はなかったんだな。多分そうさ。女は男に愛される必要があるけど」

「どうしてそうなの?」

「女は自分の体の中にある卵子に活動を与え、できた小さな生命を安全に育てる為に、男の愛情を必要とする筈だ。そして卵子に活動を与えてくれたということで、男の愛を確認することができる。だけど男は、その役目を果すために女の愛を必要としない。だから神さまは、男に女の愛を確かめる方法を与えてくれなかったんだ」

「そんなら、それではいけないの」

「だけどさ——」

と男は女を見上げた。

「いつの間にか、男も女に愛されたいと考えるようになった。これは確かに何かの間違いさ。そして女の愛の証拠を摑もうとする。これは恐ろしく難しいことだよ」

「あなたにはできて?」

男は弱々しく微笑した。

「男の愛が、女の細胞に活動を与えることなら、女の愛も、何か男に与えることでなきゃならないだろうな。それは何かと言うと、神さまも予定してなかったことなんだから、多分何か人工的なものだろうね」

女は男の傍を離れ、隣の部屋へ入った。

「お金なら上げられるわ」

女はネグリジェを脱いでベッドの上に投げると、衣類戸棚を開いた。幾つもの服が下っていた。女はそれを選んでいた。

裸の女の肩に男の手が触れた。女はその手に眼を落して、嘲るような微笑を浮べた。それから眼を閉じると男の胸に背をもたせかけた。

2

ドアを閉めると女は鍵の束をハンドバッグへ入れた。イグニション・キーは別になっていた。女はハンドルの前に乗りこんだ。久保はその横に坐ると眩しそうな眼をして前を見た。

車が走り出すと彼は紙袋からハンバーガーを出して噛った。一口噛るとそれを女の口へ持って行った。
「いらないわ」
女は顔を反らして前を見ていた。
「あのあと、いつも何か食べたがるのね」
「腹が空くよ」
女は嘲るように小さく笑った。
灰黒色の道の遠くを人が歩いていた。車は間もなくそれを追い抜いた。久保は犬を連れたその老人へ落着かない眼を向けた。
車は住宅の多い地区から抜けると電車の通っている道路へ出た。女はそこでガソリンスタンドへ車を入れた。二人は車をおりた。
久保は給油器のメーターがくるくる回るのを熱心な眼差しで見ていた。
「代ろうか」
給油がすんだ時久保は言った。
「いいわよ。どこへ行くのか知らないでしょう」
車が動き出すと、久保はドアの方へ体を寄せて、物珍しそうに女を眺めた。女は淡い緑色のスカートに紺のカーディガンを着て、頭に花模様の入った淡茶のネッカチーフをかむっていた。
車は都心へ向っていた。二人は言葉を交さなかった。やがて渋谷から環状線の中へ入った。道路は何処(どこ)まで行っても混んでいた。そしてその流れを信号機が、意地悪くひっきりなしに遮断した。
道路は傷つき、曲っていた。その上の空気は埃を含んで濁っていた。久保は、ダッシュボードの上に薄く積った埃を、指で注意深く左右へ動かしていた。
車は長い時間かかって、都心を横切り、東北の地区へ出た。所々にあまり大きくないビルのある、低い家並の道を走った。街の風景はいつまで行っても同じようであった。
やがて女はハンドルを右へ切って、左手にコンクリートの板を重ねた灰色の塀のある道へ入った。コンクリートの塀は、太陽を受けて静かに真直に続いていた。
四角なコンクリートの門柱があった。大きい鉄の格子扉が閉っていた。門柱には白い磁器の板が嵌めこんであって、それには黒く《隅田コンクリート工業株式会社》と書いてあった。女はその前で車を止めると、クラクションを鳴らした。久保は門柱の名札を気の進まない表情で見つめていた。
引きずるような足音が中から門へ近づいて来た。菜葉(なっぱ)服を着て、銀縁の眼鏡をかけた老人が格子扉の所に現れ

ると、両手で格子を摑んでじっと車の方を見つめた。
女は、フロントガラスからそちらへ顔を向けていた。年寄りの短く刈った髪は銀色に輝いて、寄せた眉の間に、まるで傷跡のような深い皺ができていた。
年寄りは扉の閂(かんぬき)を外すと、扉を一枚ずつゆっくりと左右に押し開いた。女はハンドルを回しながら車を中へ入れた。久保は、車の通る横に立っている年寄りの顔を興味深そうに見つめた。
門を入った左手に事務所らしい建物があった。その前に車を止めると、女は降りて、年寄りの所へ行った。二人はそこで二言三言、言葉を交した。年寄りは頭を小さくゆっくり何度も頷かせた。
車を降りた久保は二人と反対の方を向いていた。広い敷地であった。彼の前には、コンクリートの管が、幾つも並べて置いてあった。管の径は、人が体をかがめて通り抜けられる位であった。
きちんと行儀よく並べられた管は、その内面と隣りの管に、くっきりとした規則正しい影を作って、何処までも続いていた。久保は頭の上に両手をのせて、あちこちに視線を移していた。工場か倉庫のような大きい屋根の建物が、幾つか建っていた。女が近寄って来た。
「何だい、こりゃ」
久保は尋ねた。
「工場よ。コンクリートでいろんなものを作ってるのよ」
「今日は日曜で休みなんだな」
「そう」
「ここで何をするんだ」
「見るのよ」
女はハンドバッグから小型のカメラを出して、シャッターを切った。
「ここを書くのか」
「そう――」
女は先に立って歩き出した。地面はすべて白い硬いコンクリートで被われていた。
二人は管の並んでいる前を通った。久保は体をかがめて管の一つを通り抜けると、反対の端を女と平行に歩いた。管を通して二人は顔を見合せた。二人は微笑した。
「きれいね。こういう無機質の物体が並んでるのって――」
声が管の中に反響した。
「――同じ無機質でも、海岸にある色んな形をした岩なんか、これに比べると、なんか一生懸命芸をしてるみたいだわ」